



在宅医療について住民と議論する発起人の納利一医師(写真左)とパネリストら

「在宅医療」の在り方考える 鹿児島市で座談会



希望の最期描いて

鹿児島市の中洲小学校で20日、ヲサメ内科クリニックの納利一院長(77)の呼びかけで、在宅医療の在り方を考える座談会が開かれ、地域住民ら100人以上が参加した。希望する場所で最期まで過ごすために、誰と何を考えておけばいいのか。パネリストとして登壇した3医師の発言要旨を紹介する。(中咲貴稔)



「家族と十分に話し合っておくべき」と訴える五反田満幸さん

五反田内科クリニック

五反田満幸院長(64)

自分の最期は自分で過ごしたいかを、家族としっかり考えておくことが一番大事だ。意思が十分に伝わっていないければ、医療関係者は残された家族の気持ちをくむことになり、本人の意に反した処置であって

も行わざるを得ない場合がある。「尊厳死」という言葉を知っているだろうか。本人の意思で延命治療を断り、人間としての尊厳を保ちつつ安らかな自然死を遂げる考え方のことだ。「死ぬまでにどんな生き方をするか」を考える、一つのきっかけになるのではないか。

患者のほとんどは、病院やケアマネジャー、訪問看護師からの紹介だ。往診患者の15人以上が百歳を超えている。99歳も10人近くいる。人生は思った以上に長い。じっくり話し合いができるような機会をつくってほしい。

家族の理解を忘れない



「若者も交えて命の話」と話す中野一司さん



「分からないことは相談してほしい」と語る久松憲明さん

若者も一緒に命の話を

在宅医療の大事な考え方は、「その人の最期のゴールまで寄り添う」ということだ。個人の心の問題と向き合い、障害や病気の捉え方にも気を配る。「悪い部分を直す」という病院医療の考え方は、そもそも立ち位置が違う。

急な肺炎や交通事故に遭った場合などは、病院に行くべきであることは言うまでもない。しかし、老化や加齢が原因となっている場合は、病院に頼って本当に幸せになれるだろうか。この考えの延長線上に、「在宅みとり」はあると思う。

人は生きていくだけで価値がある。必ず人に迷惑をかけているからこそ、互いに助け合わなければならない。高齢者だけでなく、子どもや若者も一緒になって、「命の話」ができるような地域づくりを目指していきたい。

関心持ちまず相談して

生まれてから死ぬまで希望する医療を受けやすい時代になっており、在宅医療にも関心が集まっている。しかし、必要な情報が届いていないがたく、医師や看護師が理解できていない場合もある。分からないことがあれば、まず相談してほしい。

鹿児島県内は、単身世帯や高齢夫婦世帯が目立つ。在宅医療を受ける場所も自宅に限らず、有料老人ホームやサービスパ付き高齢者住宅を選ぶ人が増えてきている印象だ。

家族は「何かあったら大変」と、入院を勧めることがしばしば。確かに急変も考えられるが、「何かあれば対応するのが在宅医だ」と理解してほしい。研修に来た医学部生は、往診で出会う患者のリラックスした表情に驚いている。意欲ある若手も育ち始めている。

ナカノ在宅医療クリニック

中野 一司院長(61)

ひさまつクリニック

久松 憲明院長(49)